いじんものがたり

# 美しい話

## 三年生

監修 小川未明・中村孝也

# 心の飢えをみたす本

小川未明

「美しい話」は、何べんきいても心のあたたまるものです。それは、人々が美しい話に飢え、たえず美しい話を求めているからだともいえます。しかし、わたしたちが日常耳にする話の中には、意外に美しい話がすくないのは、まことに残念です。昔から「悪事千里につたわる」といいますが、反対に、人のかくれた善行というものは、他に知られず埋もれてしまう場合が多いからでありましょうか。

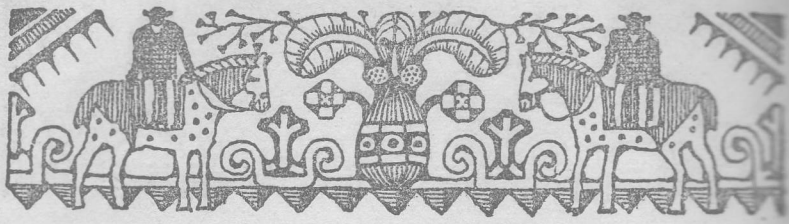
この本には、歴史上の人物や、まったく無名な庶民の、感動的な美しい話がたくさん集録されています。心の飢えをみたすに足る本として、皆さんに心からおすすめする次第です。

# 刊行のことば

人の心を清める美しい話は、聞いても話しても気持のよいものです。そして、じぶんも美しい話の主人公になりたいと願うものです。しかし世の中には、聞きたくもない、話したくもない、いやな話が、なんとたくさんあることでしょうか。もしも、いやな話がなくなって、美しい話ばかりになったら、わたしたちの毎日は、どんなに楽しくなることでしょう。

美しい話が多いことは、心の美しい人が多いということです。世の中には、いろいろな美しさがありますが、人間の心の美しさにまさるものはありません。人を愛し、社会を愛し、自然を愛する人間の美しい心からは、当然美しい行いが生まれます。みんながそう考えて美しい行いをすれば、一切の悪はなくなり、平和な世界を、きずくことも出来るわけです。科学の進歩、物質の充足もだいじですが、それだけでは、世の中はよくなるといえません。平和の根源は人間の心にあるのです。

私たちはあくまでも人間の善意を信じて、ここに「美しい話」六巻を刊行しました。



# 目次

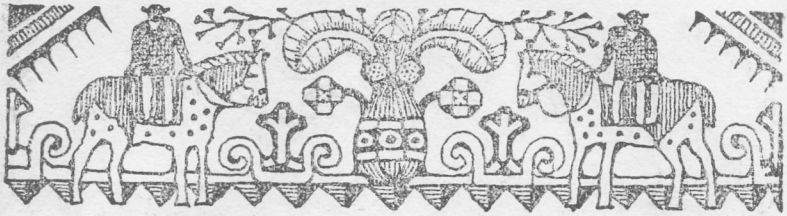

（ベーブ・ルースの話）
やくそくのホームラン……（土家由岐雄）…八

（福沢諭吉の話）
せんそうの日にも勉強……（磯部忠雄）…三

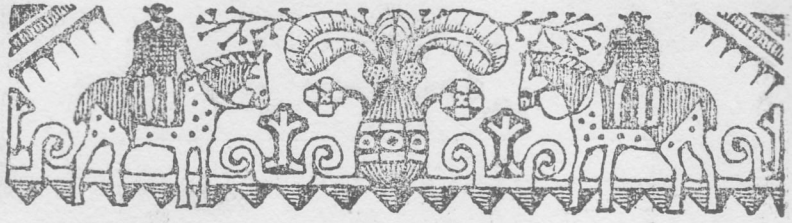
（ジャン・フランソワ・ミレーの話）
花さくまきば……（大木雄二）…三五

（小泉八雲の話）
虫もねずみもかわいそう……（渋沢青花）…五〇

（ペスタロッチの話）
たのしい学校……（清水たみ子）…六三




（宮沢賢治の話）
みんなのよろこび
みんなのかなしみ……（巽聖歌）…七三
（モーツァルトの話）
小さな音楽師……（岡上鈴江）…八七
（児玉久右衛門の話）
あたらしい村つくり……（槇本楠郎）…一〇一
（ベンジャミン・フランクリンの話）
くふうずきな少年……（奈街三郎）…一一四
（やきものし柿右衛門の話）
かきの実のいろ……（久保喬）…一二八
（ヘンリー・フォードの話）
うまなし車……（柴野民三）…一三八



(山田文右衛門の話)
こんぶのおんじん……(久米元一)…一四九
(小野蘭山の話)
草木を友に……(宮脇紀雄)…一五七
(和井内貞行の話)
十和田湖のひめます……(水谷まさる)…一六六

（山田文右衛門の話）

# こんぶの　おんじん

久米元一

お正月になると、みなさんは、こんぶでつくったこぶまきを食べますね。こんぶはよろこぶということばに、にているので、おめでたい時に、よくつかわれます。

そのほか、みなさんのおうちでも、にものや、おつゆのだしにしたり、きりこぶにして食べたり、いろいろにつかわれますね。そのこんぶには、わたしたちのからだをつよくする、大切なじようぶんがあるので、わたしたち日本人は、むかしからさかんに、こんぶを食べてきました。

また、こんぶからは、沃素というものをとって、それから、いろいろなくすりができます。みなさんが、しもやけにかかった時や、けがをした時などにつけるヨードチ

ンキも、やはりこんぶからできます。

この大切なこんぶは、北の方の北海道や、樺太（今のソ連領サハリン州）の海から、たくさんとれます。こんぶは、海のそこの岩に、はえています。まるで、おびのように長くなって、なみのまにまに、ゆらゆらとゆれています。

これを舟の上から、長いさおをのばして、からめとり、海岸のすなの上でほして、ほうぼうへおくり出します。

むかしは、海のそこの岩に、ひとりでにはえているこんぶを、そのままとって来るだけでしたが、いまから九十年ほど前に、こんぶを人の力ではやして、たくさんとれるように、くふうした人があります。

北海道の函館のちかくで、りょうしをしている山田文右衛門という人がありました。まい日、舟にのって、さけや、にしんをとったり、魚のとれない時には、こんぶをとって、くらしをたてていました。

ある日のこと、舟にのって、北海道の南の海で、りょうをしていた文右衛門は、ふ

と、海のそこに、みょうなものを見つけて、おもわず、はっとしました。

ふかさ三メートルばかりの海のそこに、だれがなげすてたのか、すりばちのかけらがおちていて、そのかけらから、長いこんぶが八、九ほんもはえて、ゆらゆらと、なみにゆられているのです。

「これはおもしろい。わしはこれまで、こんぶというものは、海のそこの岩にだけしか、はえないものだと思っていたのに、これで見ると、すりばちのかけらからでも、りっぱに、はえるのだ。そうだ……」

文右衛門は、なにごとか、考えついたらしく、うれしそうに、その日はかえっていきました。

すりばちのかけらに、はえたこんぶを見つけてから、文右衛門は、まい日、海に舟をうかべて、こんぶのはえている海のふかさや、そのばしょの、しおのながれなどを、ねっしんにしらべはじめました。また、

「すりばちのかけらに、はえるこんぶなら、石にも、はえるにちがいない。」

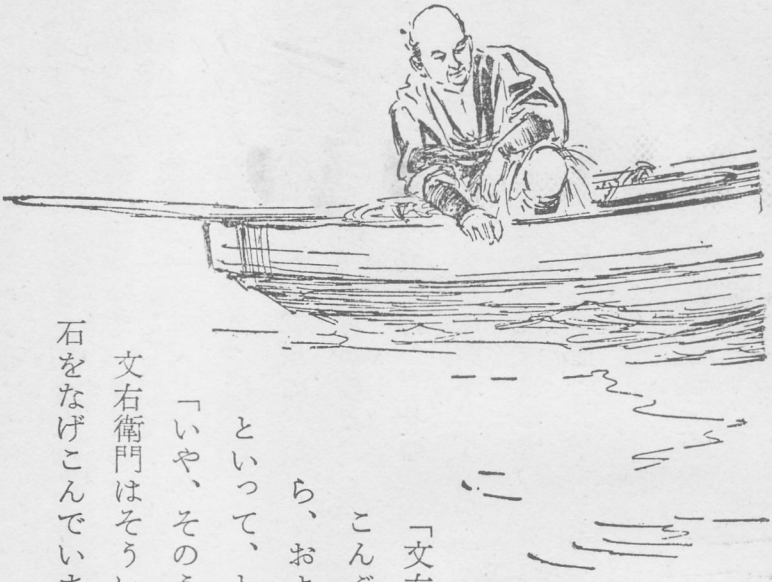
どんな石がよいかと、いろいろしらべはじめました。雨の日も、風の日も、きりの

日も、文右衛門の、このしらべはつづきました。

そして、長いあいだかかって、とうとう文右衛門は、どんなばしょがよいか、どんな石がよいかということを、すっかりしらべあげました。

いよいよあくる年、文右衛門は、五そうの舟に、石をたくさんつんでいって、前にしらべたばしょへどぶんどぶんと、なげこみました。一つなげこむたびに、この石にこんぶがはえるぞ、こんぶがたくさんとれるぞ、と、おもいながらなげこんだ石のかずは、みんなで二万七千もありました。

そのつぎの年には、五万あまりの石を



なげこみました。ところが、その時、きょ年なげ入れた石は、どうなったかと思って、海のそこをのぞいて見ましたが、こんぶどころか、なんにもはえていません。

手つだいの人たちは、みんなわらって、

「文右衛門さん、いくら石をなげこんだって、こんぶなどが、はえるものですか。むだですから、およしなさい。」

といって、とめるものさえありました。

「いや、そのうち、きっとはえる。」

文右衛門はそういって、それからもまい年、こんきよく、石をなげこんでいました。

いつのまにか、四年たちました。

文右衛門はことしもまた石をなげこもうと思って、海へ出かけていきました。すると、どうです。一ばんはじめの年に、なげこんだ石から、りっぱなこんぶがはえて、ちょうど、川に、ぬのをさらしたように、ゆらゆらと、ゆれているではありませんか。そのこんぶのあいだを、小さな魚が、うれしそうにおよぎまわって、まるで、りゅうぐうじょうのようでした。

「やあ、できた、できた。」

文右衛門は、ふなばたをたたいて、よろこびました。

文右衛門は、さっそく、そのこんぶをとって、

「これは、海のはたけでとれたこんぶです。」といって、函館のおぶぎょうさま（今の知事のような役人）の所へもっていきました。おぶぎょうさまも、たいそうめずらしくおもって、それを江戸のしょうぐんさまの所へおくりました。

それからのち、みんなが文右衛門のまねをして、海のそこへ石をなげこみ、こんぶのはたけをつくるようになりました。いまでも、北海道でやっています。そして、ひとりでに、はえるこんぶとあわせて、日

本じゅうや外国へ、どしどしおくり出しています。こんぶのおんじん、山田文右衛門の、たっとい、くしんのおかげです。

**山田文右衛門**は、北海道日高国新冠の人ですが、生まれたところは、渡島国ともいわれています。生年月日も、なくなった時も、はっきりしたことは、伝えられていませんが、昆布を養殖させる法を実行したのが、文久三年（一八六三年）だということだけは、記録にのこっています。のちには、文右衛門の養殖法がひろまり、方々の漁業組合などにも用いられ、よい成績をあげているとのことです。